

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

Data

監督：張藝謀（チャン・イーモウ）
出演：董潔（ドン・ジェ）／趙本山
（チャオ・ベンシャン）／傅
彪（フー・ピアオ）

至福のとき

（幸福時光／Happy Times）

2002年・中国映画・97分
配給／20世紀フォックス映画会社

2003（平成15）年11月23日鑑賞
＜ホクテン座・中国映画特集＞

👁️👁️ みどころ

急速に近代化が進むまち大連。そしてこのまちでリストラされ結婚もできない負け組の中年男。そんな中年男と盲目の美少女との間で展開される何とも荒唐無稽な「騙し合い」。しかしそこには本物の心が。そして善意の仲間たちに囲まれて過ごす「至福のとき」が。張藝謀（チャン・イーモウ）監督の「しあわせ3部作」の完結編はホントに最高。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<しあわせ三部作>

張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『あの子を探して』（99年）、『初恋のきた道』（00年）、そして『至福のとき』（02年）は、「しあわせ三部作」とネーミングされて大ヒット。多くの人達に感動の涙を流させた。もっとも、この邦題は日本だけで通用するもので、中国人には分からない。それぞれ原題は、『一個都不能少／Not One Less』、『我が父親母親／The Road Home』、『幸福時光／Happy Times』というもの。しかし、この『至福のとき』という邦題のつけ方は絶妙！映画の冒頭に出てくる「至福の間」とか「至福旅館」という発想はちょっといかかわしく怪しげだが、あんまをしてもらい眠ってしまう「至福のとき」、そして本物の人達と一緒に過ごす「至福のとき」を心から味わうことができる心温まる名作だ。

<原作は？>

『至福のとき』の原作は、張藝謀の衝撃の監督デビュー作『紅いコーリャン』の原作者である現代中国の代表的作家、莫言（モー・イエン）の短編小説。もっとも、映画化にあたってはその物語は大幅に変更され、盲目の少女ウー・インも新しく作り出されたキャラ

ラクターとのこと。しかし「荒唐無稽なおとぎ話」という内容では原作に忠実らしい。そしてこの物語は後述のように、本当に荒唐無稽・・・。

<盲目のヒロインは5万人の中から>

張藝謀監督は、女優搜しの名人。『紅いコーリャン』（87年）、『菊豆』（90年）等の初期作品における鞏俐（コン・リー）はもちろんだが、『初恋のきた道』（00年）での章子怡（チャン・ツイイー）の発掘など、「映画の成功の半分は脚本に、半分は俳優にかかっている」と語る張藝謀の女優搜しの術は尋常ではない。この『至福のとき』における盲目のヒロイン、ウー・インを演じる董潔（ドン・ジエ）は、中国初のネットでの公開募集に集まった5万人の中から選ばれた80年生まれの大連出身の美女。彼女は盲目の女性という難しい役を本当に見事に演じている。彼女の次回作はリュウ・イエと共演する『恋人』という映画とのことで楽しみだ。

<大連というまち>

大連のまちは、私が2000年にはじめての中国旅行に出かけたところ。ニュースとして知っていた大連という近代都市、美しいまちを、この時私ははじめて訪れ、多くの体験をすることができた。この映画はそんな大連のまちが舞台。もっとも、近代化が進んで、高層ビルが立ち並び、車のラッシュが日常風景になっても、そしてまた改革開放政策の先頭を走ってきた人達がかかなりリッチになっても、まだまだ中国全体が豊かになったわけではない。その陰の部分では、近代化の波について行けずに倒産、失業したり、株への投資に失敗して「敗者」となった、多くの弱者や貧困層があることを忘れてはならない。この物語は、そんな近代都市大連における弱者の中年男チャオと父親の株投資の失敗によって一人世の荒波に放りだされた盲目の少女ウー・インとの心温まる人間ドラマだ。

<中年男の主人公は・・・？>

中年男の主人公チャオ（趙本山／チャオ・ベンシヤン）は独り者。工場をリストラされてクビになったのに、次の仕事は容易に見つからない。だから結婚もままならない。今までは細身の女性と何回も見合いをしてきたが全然ダメ。そこで今回は思いきって方針転換。思いきり太めの女性（董立范／ドン・リーファン）とお見合いだ。「太った女性は温かい」、「離婚歴があることは人生経験が豊富なことだ」とすべて前向きの発言。だから「結婚式には5万円かかる。何とかできる？」と尋ねられると、「何とかするさ。たかが5万円！」と威勢のいい発言。

チャオは人がいいといえばそうだが、ちょっとノー天気でハツタリ気味・・・？だから後に彼女から「詐欺師！」とののしられることにも・・・。ところが、彼のハツタリの才能は思わぬ方向に。それがこのドラマの面白いテーマだ。

<チャオは「至福旅館」の社長さん？>

チャオが相談したのは、工場仲間のフー（傅彪／フー・ピアオ）。しかし借金の申し込みはフーにも迷惑だし、所詮できない相談。そこでフーが思いついた「荒唐無稽な提案」は・・・？それは、アベックがよく集まる工場の裏の林に廃車として放置されているバスを改造して、アベックに提供しようというものだ。言ってみれば、中国版の簡易なラブホテル経営。そんなバカな・・・と思いつつ、他にいい考えが思い浮かばないチャオはフーと共にこのバスを修理した。といっても、外から内部が見えないように目隠しをし、真っ赤なペンキを塗り、ベッドを置いただけだが・・・。それでもこの種のサービスの潜在的ニーズはやはりあるもの。たちまち見学客や、何と100元のチップをくれるというお客（？）も・・・。この部屋の名前がいい。フーが名付けたこのバス（部屋）の名は何と「至福の間」というものだった。そして多少ハッター屋のチャオは、結婚したいと思っている彼女に対して、「自分は至福旅館の社長だ」と名乗ってしまった・・・。

<太めの女性の二人の子供は？>

チャオが見合いた太めの女性には子供が二人。一人は実の息子で、母親と同じく太め（というレベルではなく、巨大なデブ（失礼）で、いかにもわがままそう。しかしもう一人遅れて登場するのは、何とも可憐なかわいい女の子。スクリーンに初登場した時点でハッとするような美少女で、これがヒロインのウー・イン（董潔／ドン・ジエ）だが、何と彼女は盲目。そして説明を聞いていると、ウー・インはこの太めのオパサンの実の子ではなく、離婚した男が置き去りにした子供らしい。だからこの女性の家庭では、明らかにインは冷遇され、やっかい者扱いされていた。そしてチャオは、女性からこのインの仕事を世話してくれと頼まれた。インがアパートの部屋の中にいると、チャオと部屋の中でイチイチやるのに不便というのが理由だが、どうも本心は「やっかい者払い」にあるらしい・・・。

<ウー・インの仕事探しに奔走するチャオ>

リストラされて自分の仕事すら見つからないチャオにインの仕事先など見つけれられるはずがない。しかし「惚れた男」の弱みで、女性から強引に頼まれると、「至福旅館」の社長としては、断るわけにはいかない。そこで友人のフーに相談すると、何ともすばらしい案が出てきた。オンボロバスを改造した「至福の間」でインを働かせればいいのだ。なぜならインは全然目が見えないのだから。本館とは違う別室は自然な雰囲気の中で過ごすため、わざとオンボロなバスを改造して使っていると説明しようというわけだ・・・。そして至福旅館の社長のチャオと支配人のフーの二人は、インと面接。この二人のコンビの息はピッタリだ。そして仕事の現場へ案内。ところが間の悪いことに、工場裏の林は公園に整備

するため、邪魔なバスはクレーンでつり上げられている始末。それでもとっさにチャオは、インの目が見えないことを利用して、「改装の予定の報告がされていない」と作業員に対して大声で怒鳴りつけ、一人芝居を演じたが・・・。

こんな失敗をしたり、女性のアパートへインを連れ戻したら既に居場所がなくなっていたり、インの「従業員宿舎」（実はこれはチャオのアパートそのものだが・・・）を提供してやったり、チャオはインの世話で大変だ。もっとも、これは結婚を願うあの太めの女性に気に入られたいと思うところからスタートしたものだったが・・・。今や・・・？

＜あんま室での至福のとき＞

インの仕事をつくりだすために新たに至福旅館に備えつけられたのは、マッサージルーム（あんま室）。しかし実はこれはニセモノ。だってチャオは至福旅館の社長ではないし、チャオがフーと共に行ったインの面接も一種の詐欺行為。まさにインの目が見えないことを利用して、社長もどきのハッターと面接もどきの会話を続けていたにすぎない。そしてあんま室も・・・。何とこれは、チャオ達が勤めていた工場が閉鎖されたため、今は遊んでいる工場の一部をさまざまな廃材を利用してつくった仮設のお部屋だ。社長のチャオが目が見えないインを「職場」である「あんま室」に案内するシーンは実に傑作。「ここが入口、ここが廊下だよ。壁も柔らかいだろう。この突き当たりを右に曲がって・・・。そしてこれがベッド。穴の開いているところが呼吸するところ・・・。」何ともはや・・・。

さらに傑作なのは、このあんま室に通うお客さん。チャオ社長が特に親しい有力者である師範大学のリー教授やレストランのニウ社長に化ける（？）のは、チャオと同じ工場をリストラされて失業中の工場仲間たち。彼らもチャオの頼みを受けて、あんま室の設営から、お客としてのお芝居まで付き合わされる羽目に。しかし意外や意外！インの客としてあんま室で受けたインのマッサージは最高！つい、うとうとと眠ってしまう客が続出し、大好評。これぞまさに「至福のとき」となった・・・。

＜通貨偽造罪と詐欺罪は成立するか・・・？＞

チャオやチャオのリストラ仲間たちはみんな善良な人達だが、問題はみんなそろって貧乏なこと。はっきり言えば金がないこと。だから、にわか客としてウー・インのマッサージを受けて、至福のときを過ごしても、インに支払わずか5元のキャッシュ（お札）がない。そこで一人の仲間が考えついたのが偽札。どうせ今インの周りにはチャオの仲間たちばかりだから、偽札を渡してもその感触が本物と同じであればインには分かるはずがないということだ。しかし、これははれっきとした刑法上の通貨偽造罪という重大な犯罪に該当するし、インに対する詐欺罪も成立するもの。もっとも、チャオたちには、偽造した通貨について「行使の目的」があるのかどうか、またインを欺罔してその対価としてのマッサージを受けようとする意思（故意）があるのかどうか、と考えると該当しない

のかも・・・？これは刑法上の犯罪の成否という法律論としては非常に面白い問題・・・。
それはともかく、このようにチャオとその仲間たちはインを騙し続けることに一生懸命だった。

＜善良な人達と過ごす時間、これぞホントの至福のとき＞

盲目のインは、目が見えない分、通常人よりも他の感覚は敏感。特に聴覚や触覚、そしていわゆる第六感も・・・。面接の時は・・・？宿舎に案内された時は・・・？「職場」と言われあんま室に案内された時は・・・？最初のお客さんをマッサージした時は・・・？そしてお金をもらった時は・・・？また最初の「稼ぎ」で社長のチャオにアイスクリームをごちそうしようとした時の気持ちは・・・？どこまでがホントと信じており、どこからがインチキと気付いていたのかはよく分からないが、少なくとも偽札をつかまされた時点では、インははっきりとチャオらの嘘に気付いていた。しかしインは・・・？

＜父親からの手紙＞

インは大切な手紙を持っていた。それは株で失敗し、今は深〔土川〕（しんせん）にいるはずの父親からの手紙。やさしい父親は、お金を貯めたらインを迎えにくる、そしてきっとインの目を治してくれると言っていた。だからその手紙にはきっとそういう文面が綴られているはずだった。ところがチャオが結婚相手として望んでいたための女性は不親切。手紙を読んでくれと頼んでもまともに読んでくれない。だが、この社長さんは信用できる。そう信じたインは社長さんとその友人フーと食事をしている時、「この手紙を読んでくれ」と手渡した。女性の不親切さを目撃しているチャオは、「ああ、いいよ」と言って手紙を読んでやったが、そこには「株で失敗して、遠くへ行く」という文面だけ。手紙を読み終わったチャオは、インから他には何か書いていないか？と真正面から質問されて、さて困った。手紙は一枚だけだし、裏を見ても、目を凝らして見ても、他には何も書いてなかったからだ。しかしそこで発揮されたのが、またチャオのハッタリ屋としての才能。とっさの思いつきで「ああ、あった。あった。裏にあった。しかしすごく小さい字で書いてあるので今は読めない。今晚老眼鏡をかけて読んでおく。そして明日の朝教える」と、うまくインをなだめるのに成功(?)した。

＜思いがけない「事件」の勃発＞

しかしその日、父親からインにあてた手紙をデッチあげたチャオを待っていた運命は・・・？何と予想もつかない交通事故。手紙を読みながら道路を渡ろうとしたチャオは、トラックに撥ねられて突然、ジ・エンド。帰らぬ人となってしまった。あつけないものだ。そしてこの交通事故を聞いて急遽病院に駆けつけたフー達に警察官から渡されたのは、チャオが書いた「娘にあてた手紙」だった。

＜インの伝言、そして感動的で涙を誘う父からの手紙＞

チャオの事故をインに報告しにきたフー達。しかし、宿舎にいないはずのインはおらず、テーブルの上にはソニーのウォークマンとこれ聞いて下さいというインのメモが……。ウォークマンを再生するフー達。そこには、インのチャオ達に対する感謝の気持ちと自立への決意が丁寧に語られていた。そして「お金は偽物でも、皆さんの心は本物でした」という名セリフも……。他方、今やチャオの形見となり、直接インに読んでやることもできなくなったチャオの手紙を読むフー。そこには何と、チャオが昨日の晩デッチあげた、盲目の少女インに対する父親からの愛情のこもった文章が面々と綴られていた。その文章は、娘を想う父親の気持ち、娘の目の治療に思いをはせる父親の気持ち、娘の目を治すために一生懸命働く語りかける父親の気持ちを伝えるもの……。工場をリストラされた平凡な人間であっても、娘に想いを寄せる父親の気持ちを綴ったこの手紙は、超一流の作家の文章にも負けない立派なもの。もちろんこの文章はすべてデッチあげだが、これぞ善意、これぞ良心、そしてこういう人達に囲まれて過ごす時間こそまさに「至福のとき」と誰もが思う手紙の内容だ。また、この手紙はフーがテープを巻き戻して再度再生されるインの声にかぶせて朗読されるから、その効果が倍増しているのは何ともうまい演出。涙がドッと溢れてくるのを止めることができない本当に張藝謀監督ならではの名場面だ。

＜自立するインの未来は・・・？＞

他方、インは……。インは今バスが通る大きな道をただ一人、涙を拭いながら未来に向かって歩み始めていた。そのバックにはチャオの手紙を読むフーの声が。もちろん、インはチャオが交通事故にあって死亡したことも知らないし、この手紙を読む声がインに聞こえることもない。しかし、「だから、お前を迎えに行くまで、父さんを信じて待っていてくれ」、「いろいろ嫌なことがあるだろう。つらいこともある。だが、寂しくても負けてはいけない。苦しくとも希望を捨ててはダメだ。信じて頑張り続けること。希望を失わなければ、いつか必ず夢はかなう。金ができるまでの辛抱だ。すべてはよくなる。きっと、その日がくる」と語りかけるチャオの手紙は、きっとインの心に届いていることだろう……。映画が終わってもしばらく席を立つことができないほど、何とも感動的なラストシーンだ。

2003（平成15）年11月25日記